



東京都現代美術館 チーフキュレーター

好きという気持ちに誠実に学んで 見つけ出したフリーダム

名門大学を卒業すれば、たしかな未来が約束されるわけではない。
自分の心の声に正直に学んでこそ、進むべき未来は見えてくる。
白紙のキャンバスに美しい作品が立ち上がるように、
彼女は圧倒的な自由という自分自身の生き方を、学びの中から描いていた。

人はいつでも、学ぶことができる。
どんな学びからも、育つことができる。
さまざまな学びの道を経て、今ある人の
豊かな声を聞きに行こう。



ゲームのように
勝ち取った進路には
見いだせなかった生きる価値

キュレーターという職業は、まだ日本では
広く認知されているとは言い難いかもしれ
ない。博物館や美術館で収集する資料の鑑
定や研究を行う専門職というくくりで、学芸
員と同一視されている場合も多い。しかし欧
米では、キュレーターは展覧会のコンセプト
作りや展示物の選考、パンフレットの文面も
ふくむ観客への見せ方といった館の運営全
体に責任を負い、ときには建物の設計にま
で関わる、館長に近い(実際に兼ねる人物も
多い)権限を持つ職業としてステータスが確
立されている。専門知識を生かして展示物
と来館者を効果的に結びつける、総合プロ
デューサー的な存在と言えば近いだろう。

東京都現代美術館でチーフキュレーター
を務める長谷川祐子さんは、日本におけるそ
うした本来の意味でのキュレーターの先駆
けのひとり。04年に開館した金沢21世紀美
術館では立ち上げの段階から関わり、個性
的な建物や展示が話題を呼んで、年間入館
者数157万人という驚異的な大成功を収め
た実績を持つ。しかし、じつは彼女が最初
に得た学士号は美術とは関係がなかった。京
都大学法学部を卒業後に、東京芸術大学に
あらためて入学したのである。

「もともと絵を描くのが好きで、本当は最初
から芸大に入りたかったんです。けれど父に、
『これからの時代に女性が自立して生きて
いくためには医学部か法学部しかない。だか
らそれ以外に行くなら学費を出さない』と言
われて、仕方なく諦めたんです」

そこで京都大学を選んだのは、「東京大学
と比べると、京大のほうが天才肌の人が多い



長谷川
祐子

Yuko Hasegawa

Text: Akira Yokota
Photograph: Yukio Yoshinari



と聞いて、クリエイティブで面白そうだな、と思ったから」。サラリと言うが、京都大学は難関だ。普通の感覚なら“仕方なく”受験して合格するような相手ではない。そう問うと、これまたサラリと言ったものだ。

「試験に通るための勉強は、頭の善し悪しというより、ルールとノウハウのある、コツの問題だと思えます。ゲームをクリアする感覚で、出題者が何を求めているかを読み取り、それに対して一定の数以上のミスをしないように答えればいいんです」

その方法論は、まるで東大を目指す受験生を題材にして話題になったマンガの「ドラ

ゴン桜」を思わせる。もちろん、そのゲームに勝つためには努力も必要としたはずだが、

「だって、試験でいい点を取りさえすれば、誰にも文句を言われぬ自由が手に入りますよ。自分にとって大切な自由を手に入れるために必要だったからできたんです」

ともあれ、入学した京都大学は予想した通り、おそろしく頭のいい人が多かったという。法学部での授業も、とくに法学理論などは面白かった。しかし卒業後の進路を考えたとき、長谷川さんはやはり違うと思ったのだ。

「法律家というのは、結局人の後始末をする仕事なんです。人間が生きていく上での

もっとも現実的な、大変な部分を処理する仕事。かといって、ほかに法学部を卒業した女性が活躍できる仕事は、当時は官僚ぐらいでした。私はそのどちらも、やりたいことはありませんでした。それよりも、やはり自分自身の体験を大切にしたいと思った。だから今度は自活を前提に1年間出版社に勤めてから、奨学金も得て芸大に入り直したんです」

将来が約束された堅い道ではなく、本当に自分の進みたい道へ。そこから、長谷川さんにとっての本当の学びの始まりだった。

体験的な学びの中から 切り拓かれた進むべき道

念願の芸大での学生生活は、楽しいカルチャーショックから始まった。

「京大生とはまったく違って、美術学科の同級生はみんな汚い格好をしているし、誰も朝、新聞を読んで来ないことに驚きました。新聞は、石膏で作品を作るときの芯材だと思っている人たちなんです。私の専攻は美術史でしたが、東京芸大では作品を論じる上では使われている素材や制作法を知らねばならない、という考え方で実習もありましたから、私もそれまでは履き心地が嫌いだっただジーンズを生まれて初めて履き、それがワークウエアとして最適であることを身をもって知ったんです」

まさに体験的な“学び”である。

「当時の芸大には日比野克彦さんや川俣正さんなど、そうそうたる人々がいて、彼らとの交流も面白かった。これまでの人生でもっとも楽しい時期でしたね」

のちに世界的な活躍をすることになる彼らの才能は、当時から圧倒的だったという。

じつは長谷川さんは、高校時代には自身がアーティストになることを夢見ていた。しかし、他の人の作品を見て、「私には才能はない」と思い知らされ、好きだったイタリアのクワトロジェントと呼ばれる1400年代の美術史を専攻したという。だが、やはりクリエイティブへの想いは胸の奥に灯り続けていたのだろう。大学院まで進んで美術史を探究する一方で、絵画の代わりに大判のカメラで写真を撮ったり、美術雑誌のライターとして、海外のアーティストにインタビューするといった仕事もしていた。そうした経験の中で、現代美術作家の制作現場に立ち会い、目の前で作品が立ち上がっていく様を見て、

作り手の生きざまやコンセプトが形になる現代美術の魅力に目覚めていったという。

多くの本物のアーティストや作品に出逢い、願い通り体験から学んだ成果は、やがて人の目に留まる。19世紀の写真と美術の関係論を論じた論文が評価されて、水戸芸術館現代美術ギャラリーの職員となり、キュレーターへの第一歩を踏み出すのだ。

ただし、1989年当時の日本では、キュレーターという職業は今以上に社会的に認知されていない。自身にも、優れたキュレーターとはいかなるものか、というお手本はない。そこで長谷川さんは、本場に飛び立った。現代芸術の本場、ニューヨークのホイットニー美術館での研修という場を得て、キュレーターとしての学びを深めていったのである。

「いいキュレーターになるためには、お金を惜しまず、いい展覧会をどこにでも見に行くことだ」という彼の地のアーティストからのアドバイスに従い、長谷川さんは数多くの展覧会に足を運び、アーティストやキュレーターから直接話を聞きながら目を肥やし、現代芸術と観客を結びつけるプロデューサー感覚を磨いていった。机の前ではできない本当の学びを、彼女はそこで獲得したのだ。

帰国後、長谷川さんは世田谷美術館を経て、先の金沢21世紀美術館で本格的にキュレーターとしての能力と才能を花開かせる。そして06年、現在の東京都現代美術館チーフキュレーターに就任。国内にとどまらず、海外のビエンナーレでも活躍しているのである。

受け取り方は見る人次第 その自由こそアートの価値

現代美術というと、難解な印象を持つ人もいるかもしれない。たしかに、作者の内面を表現した絵画や彫刻は純文学にも似て、ときに受け手に困惑や違和感を感じさせることもある。しかし長谷川さんは、それでいいのだ、と言う。

「展覧会はあるテーマやコンセプトに基づいて企画しますが、そこでの観客の反応は、必ずしもこちらの思った通りではありません。え、こんなのがウケるの、ということもあれば、分かってもらえないこともある。でも、それでこそアートなんです。作品をどう受け止めるかは自由。分からないなら分からないでもいい。でも、分からないけれど忘れられないような、その人でなければ得られない出逢いを提

供することが私の仕事です。その圧倒的な自由こそ、アートの価値なんです」

それは、多くの人に同じ満足を抱かせてこそ成功と評される、商品との違いでもある。

「たとえば人気のテーマパークは、すべてのお客さんに同じ体験を約束します。私が予定調和と呼ぶそれは期待を一切裏切らない、思った通りの楽しさです。それを否定はしないけれど、人は多様性がある方が生き延びられる。アートに触れることで、少しでも多くの人に多様性を獲得してほしいと思うんです」

だからそれを提供する場を楽しいものにすることに尽力する。

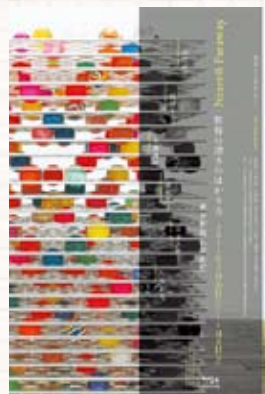
「金沢では、そこにいる人が綺麗に見える場所を目指しました。来館者はもちろん、清掃員の掃除する姿までもがカッコよく見える場所に。そうすれば、やってきたお客さんも自分自身がクールでカッコいい、高められた存在になれる。そしていつ行っても常に新しいものに出逢えるよう、天候や時間、季節などの光の変化で見え方が変わる展示にしました。今までの美術館にどうしてみんなが来なかったかといえば、暗くて怖くて子供が泣く場所だったからです。そうでなく、誰もが何度も足を運びたい場所にするべきだったんです」

東京都現代美術館の観客も、20～30代の若者層が圧倒的に多いという。

「カッコいい、クールなアートに出逢える場所だから、そうなっているんです」

絵描きになりたかった少女は、たくさんの知性や才能との出逢いという学びを経て、今、アートを通して人々がカッコよく、自由になれる場を創り出している。それは好きな道ではあったけれど、必ずしも楽な道のみではなかったと言う。

次回企画展 (2/26 ~ 5/8)



人、 学びに 出逢う 01

「だけど、好きで楽というのは、お風呂に入っているようなもの。また、いくら懸命に学んだフリをしたところで、好きではないものは本当に自分の中に入っては来ないと思うんです。自分でも、これまでを振り返るとどうして楽な方に行かないんだろう、と思うけれど、きっとこっちのほうが面白かったからだし、好きなことに対して誠実でさえあれば、いつも誰かが助けてくれた。だから私はここにいます」

好きだけれど楽ではなかった、学びの道。それはルールやノウハウでは手に入らないからこそ、今の彼女を輝かせているに違いない。

PROFILE



はせがわ・ゆうこ 兵庫県出身、東京都現代美術館チーフキュレーター／多摩美術大学特任教授
京都大学法学部を卒業後、出版社勤務を経て東京芸術大学、同大学院美術研究科修士課程終了。水戸芸術館学芸員、ホイットニー美術館研修、世田谷美術館学芸員、金沢21世紀美術館学芸課長・芸術監督を経て、06年より現職。同年に多摩美術大学芸術学科特任教授にも就く。イスタンブールやサンパウロなどで国際展を企画。著書に「女の子のための現代アート入門」(淡交社)がある。

長谷川さんがチーフキュレーターを務める東京都現代美術館では2月26日から、古い建物や風景と美術を融合させる手法で四国・金刀比羅宮の再生プロジェクトを進めている田窪恭治氏の個展と、日本と東京の美術の新しい動きをグループ展形式で紹介するシリーズ企画「MOTアニュアル」の第11回となる「Nearest Faraway | 世界の深さのはかり方」を開催する。

作品に触れて変化するみずからの心の声に、耳を傾けに足を運んではいかが?

東京都現代美術館 ☎03-5777-8600(ハローダイヤル) <http://www.mot-art-museum.jp>